

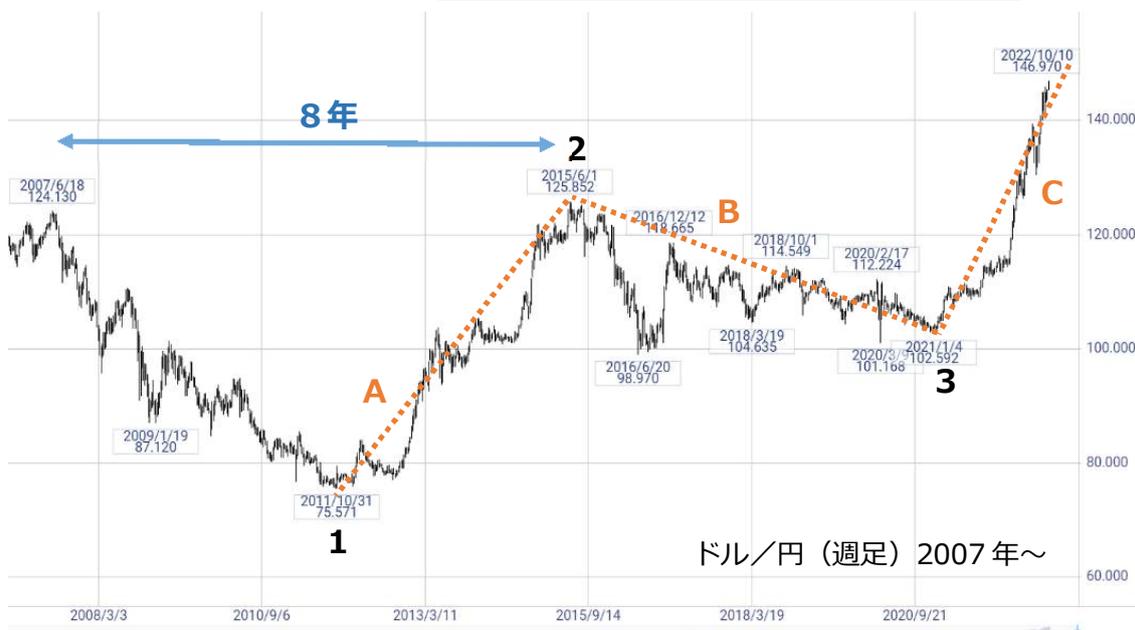
■ ドル/円が「8年サイクル高値」をつけに行くとき

ついに、ドル/円は147円台を試そうかという動き。つまり、9月22日に日銀が介入する直前につけた高値を難なく上抜けてきた。

もともとが、目下のファンダメンタルズに沿った当然のドル高であり、依然として日銀の超緩和姿勢にも変わりがない。そのうえで、前回の介入ラインをすんなり超えてきたとなれば、そこから一段の上値追いに弾みがつくのも当然である。

本日（13日）発表される9月の米消費者物価指数（CPI）の結果は目先のな波乱要因にはなり得るが、米連邦準備理事会（FRB）の引き締め方針に大掛かりな変更が施されない限り、まだドル/円には一定の上値余地があるということになろう。

一つの目標水準は、やはり150円前後ということになる。最も単純な根拠は、下図でも確認できるように「2011年10月につけた75円台の安値（図中1）」と「2015年6月につけた125円台後半の高値（図中2）」、「2021年1月につけた102円台半ばの安値（図中3）」を元に弾き出される『N計算値』が150円前後になるからである。



なお、図中の1から2を「A波」の上昇、2から3を「B波」の修正とした場合、2021年1月安値からの波動は「C波」の上昇ということになる。そして、このC波は既に5波構成を成して、今年8月初旬の安値＝130.39円からの上昇が「第5波」と考えると、そろそろC波自体が“終点”を迎える可能性もあると見られる。

本欄の長い執筆履歴の中には過去に幾度も登場する話だが、過去のドル/円の価格推移には8年ごとに目立った高値をつけるパターン（＝8年高値サイクル）の存在が認められ、実際、2007年6月高値の次に目立つ高値は2015年6月高値であった。

つまり、次に目立った高値をつけるのは「2015年6月の8年後＝2023年6月あたり」ということになり、数カ月の誤差が生じることを考慮すれば、既に“その時間帯”に入っていると考えることもできる。

もはや、FRBによる「連続&大幅利上げ」の影響は米住宅市場や米株式市場などにおいて徐々に顕著なものとなり始めており、そう遠くない将来において引き締めの勢いは大幅に鈍ると想像できる。少し長い目で、ドル/円の上昇基調も“終点”を迎える可能性が高いということになろう。

（10月13日 10:00）